

<旭川市博物館について>

- ① 一昨年、道を退職し、旭川に戻ってきてから、まず訪れた場所が見本林と博物館であった。その時、ちょうど博物館では、「恐竜サイエンス」という特別展が科学館と合同で開催されていた。原寸大の骨格標本や恐竜の視野で見ることのできる双眼鏡、化石発掘体験コーナーなどがあり、楽しみながら学ぶことができた。平成23年度においてもこのような取り組みが行われたとのことであるが、平成23年度の企画展示の概要と入場者数について説明願う。

（社会教育部）平成23年度については、「イヌイトの壁掛け」展、「日本国の黒曜石と火山研究」展、「桶づくりの道具」展、夏休みにはロボットをテーマに特別展として「ロボワールド」を実施した。

「イヌイトの壁掛け」展については、網走市にある北方民族博物館が所蔵する資料の展示を行い、4月29日～5月29日の期間で、入場者数は2,705人であった。

「日本国の黒曜石と火山研究」展については、学芸員の収集資料の展示を行い、10月2日～11月6日の期間で、入場者数は5,071人であった。

「桶づくりの道具」展については、市民の皆様から寄贈頂いた関係資料の展示を行い、12月23日～2月11日の期間で、入場者数は2,221人であった。

特別展「ロボワールド」については、科学館と博物館の2会場において実施し、科学館ではアシモやムラタセイサク君をはじめとする現代のロボットの展示やデモンストレーションを行い、博物館はからくり人形などの日本の伝統技術を知って頂く場とした。7月16日～9月4日の期間で、博物館の入館者数は7,733人であった。

- ② 平成24年度においても、企画展示が予定されており、予算計上されているわけであるが、平成24年度の企画展示事業の概要についても説明願う。

（社会教育部）平成24年度の企画展としては、写真家・松下実氏の写真により、昭和20年代、30年代の生活を振り返る「時の流れに・私の旭川」展、市立函館博物館の協力を得て、同博物館が所蔵する画家梁川剛一氏の作品を俯瞰する「昭和の名作挿絵」展、旭川市博物館が所蔵する履物資料から暮らしを振り返る「この街を歩く 一足下から振り返る旭川」展を開催し、昭和という時代をそれぞれの視点から見つめ直してみたいと考えている。

- ③ 博物館は平成10年から平成17年の8年間、入館料無料であったと承知をしているが、当該8年間における平均入館者数について示せ。

（社会教育部）平成10～17年度における無料期間中の入館者数は、平均で34,133

人となっている。

**④ 直近5年間の入館者数の推移について示せ。**

(社会教育部) 平成 19 年度は 20,744 人、平成 20 年度は常設展示室リニューアルのため4月～10月に休館していたことにより 13,932 人、平成 21 年度は 29,592 人、平成 22 年度は 43,341 人、平成 23 年度は2月末時点で 34,299 人となっている。

**⑤ 平成 18 年度の入館料有料化により3万人を割ってしまった入館者数が、平成 21 年度以降、回復した要因は、やはり平成 20 年度のリニューアルによるところが大きいのか。その回復の要因について説明願う。**

(社会教育部) 平成 20 年度に実施した常設展示のリニューアルによるところが大きいと考えているが、特別展の開催や、緊急雇用創出事業を活用し、学校向けの学習プログラムにより学校利用の促進を図ってきたことも大きな要因になっていると認識をしている。

**⑥ 常設展示のリニューアルが成功しての入館者数増ということであるが、オープン当初と比較して展示が大きく様変わりしていることに正直驚いた。市としては、どんなコンセプトでリニューアルに取り組んだのか。**

(社会教育部) 常設展示は上層階と下層階の2層構造となっており、平成 20 年度のリニューアルは、このうち上層階について行ったものである。

博物館が所蔵する日本有数の民族資料を活用することにより、アイヌの人々の歴史や文化について積極的に情報発信するとともに、博物館としての個性を強く打ち出そうということを意図している。

**⑦ アイヌの人々の歴史や文化について積極的に情報発信を行い、博物館としての個性を強く打ち出そうとしたとのことであるが、北海道には、博物館と呼ばれる形態でないものまで含めると同様の施設はあちこちにあるのではないかと思うが、道内他都市のそれらと比較した場合の旭川市立博物館の個性とはどんなものか。**

(社会教育部) 旭川市博物館は、大きく「北国の自然と人間の関わり」をテーマに、自然と人文の両分野に跨る資料を網羅した、いわゆる総合博物館として展示を構成している。中でも、当館が所蔵するアイヌの人々をはじめサハリンやアムール川流域などの北方民族資料は、日本有数のコレクションとして知られているところであり、これらの資料をもとにアイヌの人々や北方民族を大きく取り上げた展示は、道内他都市の博物館、さらには全国の博物館を見ても、当館の個性といえるものであると認識を

している。

⑧ 博物館は市民だけではなく、市外から訪れた方々にとっても、そのまちの成り立ち、歴史・文化を理解するうえで大切な施設であると考えます。

御承知のように、旭川市には、アイヌの人々による自然との共生の暮らし、屯田兵入植による開拓、旧第七師団の駐屯による拡大・発展という歴史があるわけで、その中で、アイヌの人々の歴史や文化に特化したものであるということであれば、そういうコンセプトに立った上で、展示が行われているということをはっきりと示していくべきではないか。

(社会教育部) 博物館では、「アイヌの歴史と文化に出会う」をキャッチフレーズとして、アイヌ文化に特化している点をポスターやパンフレット、ホームページ等でPRしているほか、「学校団体利用のための体験学習の手引き」などの冊子等でも紹介をしているところではあるが、今後さらなる周知に努めて参りたいと考える。

⑨ 旭川開拓の歴史を学ぶには旭川兵村記念館がある。旧第七師団の歴史を学ぶには北鎮記念館がある。博物館もアイヌ文化に特化したということであれば、軸足をしっかりと定めて、コンセプトをはっきりとさせた上で、3か所が連携しながら、子供たちにきちんとした旭川の歴史を学ばせ、郷土旭川に対する愛着を育てていくことが大切であると考えますが、市としてはどのような認識を持っているか。

(社会教育部) 豊かな自然を背景にアイヌの人々が自然と共生する独自の文化を築き、また入植してきた人々がたゆまぬ努力と英知を積み重ねてきたことによって、今日の旭川市があるものと考えている。

博物館では、アイヌの人々の歴史や文化に触れることができる講座や体験学習のほか、屯田兵や第七師団との関わりなど郷土の歴史について学ぶ事業を実施してきているところであり、また平成21年度からは、学校利用の促進を図ることを目的として、緊急雇用創出事業を活用し、体験的に郷土の歴史や文化に触れることができるような事業を展開してきたところである。学校からは、体験をとおして学習することにより、子供達の興味・関心が高められ、効果があったとの評価を頂いているところである。

平成24年度についても、郷土に対する理解を深めるため、講座等を引き続き開催するとともに、民間施設とも連携を図りながら、これまで作り上げてきた学習プログラムを活用し、事業展開していきたいと考えている。